"ウィリアム・カーロス・ウィリアムズの""The Wanderer""について"

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 康雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4896

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズの "The Wanderer" について

小 西 康 雄

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズは，ごく初期にはキーツ風の伝統的な詩を書いていたが，イマジズムの影響を受けて詩風が変わり，その実践とも言える *The Tempers* (1913) や自己の周囲の事物を忠実に描こうとする *Kora in Hell* (1921) を経て，アメリカ的な卑近な事実を，強烈な集中力を用いて自由奔放な形式で即物的に描写した *Spring and All* (1923) によって，独自の世界を築いた。そして，後には，長大な作品 *Paterson* (1946～1951) に於いて，現代の社会や人間の状況を包括的に描いたのである。

本稿では，ウィリアムズの詩風の確立という点で意味のある初期の作品 "The Wanderer" について，若干の考察を試みることにする。この作品は，1914年，エズラ・パウンドによって *The Egoist* 誌に発表されたもので，7つの部分から成る総計309行の長詩であり，ほとんどが短い詩の初期の作品の中では，特異な位置を占めている。一言で述べれば，この詩は，新しい詩的世界を求める詩人ウィリアムズの宣言に他ならない。以下，順を遂って，この詩を見ていくことにする。

全体が7つの部分から成り立っているこの長詩の最初の部分には，*ADVENT* というタイトルが付けられている。冒頭で，不思議な一羽の「カラス (crow)」が呈示される。

Even in the time when as yet
I had no certain knowledge of her
She sprang from the nest, a young crow,
Whose first flight circled the forest. (ll. 1～4)[1]

主人公の「私(I)」には未知なのだが，このカラスの姿をとった霊的な存在は，詩の進行とともに様々に変容しながら，主人公を新しい世界へ導びいていくことになる。

この霊的な存在は，ウィリアムズに大きな影響を与えた父方のイギリス人の祖母が原型となっていて[2]，*Kora in Hell* から *Paterson* にいたるまでのウィリアムズのいくつかの作品にも現われ，詩の主人公を，死の世界から蘇らせたり，ある意識の世界から別の意識の世界へと移行させたりする重要な役割を果すものと類似の存在である。もう一つ重要なのは，この詩が，ギリシャ神話のデメテルの話を枠組にしている点である[3]。大地五穀の女神デメテルは，冥府の王ハデスに誘拐された愛娘ペルセフォネをさがし求めて，老婆の姿に身をやつし，放浪の旅をする。この詩とこの神話との関係については，後に触れることにする。

「私」は，この「カラス」の飛んでいる姿から，ある一つの思いに到る。

I saw her eyes straining at the new distance
And as the woods fell from her flying
Likewise they fell from me as I followed
So that I strongly guessed all that I must put from me
To come through ready for the high courses. (ll. 8～12)

「カラス」の眼が懸命に見つめている「新しい彼方 (the new distance)」は，これから「私」が導びかれていく新しい詩の世界である。この鳥が高く舞うにつれて低くなっていく森は，自分が意識の上で鳥と同化することによって，自

分にとっても低くなっていく。低くなっていくこの森は，これまでの「私」の詩的世界に他ならず，だからこそ，「私」は，「高い道に進もうとするには (To come through ready for the high courses)」「自分自身から捨てねばならないすべてのものにはっきりと思いあたった (I strongly guessed all that I must put from me)」のである。つまり，「私」である詩人は，「カラス」である霊的な存在——詩神と言ってもよいであろう——の出現によって，新しい詩的世界を目指す決意をうながされ，それまでの自己の詩的世界との訣別を心に決めるのだ。

決意はしたものの，詩人は，いかにしてその新しい詩的世界に到達すればよいのかが分らない。詩神が投げかけた問題，

How shall I be a mirror to this modernity? (l. 18)

が常に頭の中にある。この「いかにして現代を映す鏡になるべきか」という命題こそが，この詩の主題とも言えるものである。この問題にとりつかれている間にも，鳥がまた現れる。

Suddenly I saw her! And she waved me
From the white wet in midst of her playing!
She cried me, "Haia! Here I am, son!
See how strong my little finger is!
Can I not swim well?
I can fly too!" And with that a great sea-gull
Went to the left, vanishing with a wild cry— (ll. 21～27)

前には「カラス」の姿をとっていた霊的な存在は，ここでは「巨大なウミカモメ (a great sea-gull)」に変身していて，自分が全能であることを誇示する。

ウィリアムズの詩に於いては，とくに *Spring and All* あたりではっきりし

てくることなのだが，論理や推論が拒否されて自由奔放な連想の急転や飛躍が行われ，その断絶された関係が一種の緊迫した効果を生み出す場合がある。この詩の中にも随所にそれが見られるが，この「カラス」から「ウミカモメ」への変身も，何の説明もなく行われる。

「ウミカモメ」は「荒々しい叫び声とともに消え去り (vanishing with a wild cry)」「私」は取り残されて，この *ADVENT* は終る。

次の *CLARITY* で，「私」は，この霊的な「ウミカモメ」から授った力によって，幻想的な飛翔を行う。新しい詩の世界を求めて飛翔しながら，詩人はこう語る。

I know now all my time is forespent!
For me one face is all the world!
For I have seen her at last, this day, (ll. 6～8)

「自分の時がすべて消滅した (all my time is forespent)」のを詩人は悟るのだが，これはそれまでの自己の存在の無味意さの自覚である。そして，自分を導いてくれるものの存在を知った今，その力が自分にとって「世界のすべて (all the world)」になる。

さらに，この霊的な存在が，時間や空間を超越して，現実の美を明らかにするものとして描かれ，こう続く。

... for surely
Either there in the rolling smoke spheres below us
Or here with us in the air intercircling,
Certainly somewhere here about us
I know she is revealing these things" (ll. 12～16)

「私」である詩人は，「身のまわりのどこか近くに (somewhere here about us)」「彼女がそれ〔美しいもの〕を見せてくれる (she is revealing these things)」のを知る。

ウィリアムズは，初期の伝統的でロマン主義的な作風を捨てて，次第にリアリズムに傾いていき，後には，現実のリアリスティックな描写を極限まで進めていった。詩の対象となるものは，日常の身近にあるもので，およそ詩的でない，キャンデー，チューインガム，電話器，タイプライター，眼鏡，紙切れ，にまで及んでいる。この様な事物の中に，彼は詩的世界を見出した。したがって，ここで述べられている「身のまわりのどこか近くに」という言葉には，新しい詩的世界を求めようとするウィリアムズの強い意識が現れていると言えよう。

この新しい詩的世界を示してくれる詩神として，詩人は，霊的な存在について次の様に語る。

... "It is she
The mighty, recreating the whole world,
This is the first day of wonders! (ll. 18～20)

そして，

"I will take my peace in her henceforth!" (l. 34)

という，詩神と合一しようという決意で，この部分は終る。

三番目の *BROADWAY* では，汚濁に満ちた現実の世界に，詩人は直面させられる。詩神にうながされて，彼は次の様な光景を目にする。

There came crowds walking—men as visions

With expressionless, animate faces;
Empty men with shell-thin bodies
Jostling close above the gutter,
Hastling—nowhere! ... (ll. 4～8)

「ドブ板の上を押し合いへし合いしている (Jostling close above the gutter)」現実の醜悪な人間を見た後で，詩人は詩神を目の当りに見る。

... And then for the first time
I really saw her, really scented the sweat
Of the presence and—fell back sickened!
Ominous, old, painted—
With bright lips, and lewd Jew's eyes
Her might strapped in by a corset
To give her age youth, ... (ll. 8～14)

「はじめて (for the first time)」「本当に見た (I really saw)」彼女の姿は，もう「ウミカモメ」ではなく，ギリシヤ神話のデメテルの様な老婆で，しかも，醜悪である。先の現実の人間の姿と同様なこの醜さは，現実の世界の醜悪さの具現であり，詩人に現実を悟らせようとする詩神の意図と解されよう。醜悪な姿の詩神は，詩人に次の様に問いかける。

"Well, do their eyes shine, do their clothes fit?
These live I tell you! Old men with red cheeks,
Young men in gay suits! See them!
Dogged, quivering, impassive—
Well—are these the ones you envied?" (ll. 19～23)

生きるともなしに生きている現実の人間の姿を見せられて，詩人は，

... "Marvelous old queen,
Grant me power to catch something of this day's
Air and sun into your service!
That these toilers after peace and after pleasure
May turn to you, worshippers at all hours!" (ll. 24～28)

と懇願する。「今日の／大気と太陽 (this day's／Air and sun)」は，現実のすべて，あるいは，現実を表現するために不可欠なものであって，これを把握して詩神に捧げることの出来る力を，詩人は切望している。これは，「安らぎや喜びを求める人たち (those toileres after peace and after pleasure)」が「あなた〔詩神〕の方を向くように (May turn to you)」，つまり，世の人々に真の詩を与える力を，詩人が望んでいることを意味するものである。

しかし，詩神は，詩人のこの懇願を未だ聞き入れてはくれない。

これに続く *THE STRIKE* で，詩人は，詩神に命じられて，パタソンの街を彷徨する。そして，街の有様を詩神にこう語る。

"Hot for savagery,
Sucking the air! I went into the city,
Out again, baffled onto the mountain!
Back into the city!
Nowhere
The subtle! Everywhere the electric!" (ll. 11～16)

パタソンの街に新しい詩的世界を求めて行ったのだが，詩人はそれを見出せない。詩的なものはどこにもなく，あるのは醜悪なものだけなのだ。

現実にうちひしがれる人々が，続いて描かれる。この部分は，1913年にパタソンで起きた労働争議を描いたものとされている。[4] 詩人には，この現実は，後にはそうなるのだが，今は未だ詩的世界とは受けとれない。先の *BROADWAY* で感じた現実への志向は，こうして現実を体験した今，詩人にとって崩れかかっていく。

"Faces all knotted up like burls on oaks,
Grasping, fox-snouted, thick-lipped,
Sagging breasts and protruding stomachs,
Rasping voices, filthy habits with the hands.
Nowhere you! Everywhere the electric! (ll. 39～43)

醜悪な現実の人間がうごめく世界には，詩神の存在が認められない。その現実から逃れて，詩神の元に戻った時，

"I am at peace again, old queen, I listen clearer now." (l. 48)

と，詩人は安らぎを得るのである。

これまで，詩神は，ある距離を置いて，詩人に対してきた。詩人は，詩神の示唆によって動き，自らの見方だけによって，現実を見ようとし，新しい詩的世界を求めようとしてきた。しかし，これはあくまでも観念の次元にとどまっていて，上に述べたように，本当に現実というものに直面した時，詩人は，真の新しい詩的世界が見出せなくなる。五番目の *ABROAD* からは，詩神は直接詩人に働きかけ，詩人に新しい詩的現実を把握させることになる。

Never, even in a dream,
Have I winged so high nor so well

As with her, she leading me by the hand,
That first day on the Jersey mountains! (ll. 1～4)

詩人は，詩神に手を取られて，これまでになく高く飛翔する。ニュー・ジャージーという場所が，新しい詩的世界の具体的な現れとなってくる。その自然を詩人に見させて，詩神は，はじめて真情を吐露する。

Speak to men of these, concerning me!
For never while you permit them to ignore me
In these shall the full of my freed voice
Come grappling the ear with intent! (ll. 11～14)

「詩神に託して，その自然を人々に語れ！(Speak to men of these, concerning me!)」という言葉は，ニュー・ジャージーの自然の中に，さらに拡大して考えればアメリカという土地の中に，詩的世界を求めるべきだということにとれる。そして，これを無視しては，真の詩はあり得ないという，ウィリアムズの宣言に他ならない。以下数行にわたって，同じ様に，取るに足らないものでさえそれを覆い隠すかぎりは，詩の自由はないという考えが，述べられる。

詩神のこの言葉を聞いた詩人は，こう叫ぶ。

"Waken! my people, to the boughs green
With ripening fruit within you!
Waken to the myriad cinquefoil
In the waving grass of your minds! (ll. 24～27)

これも，アメリカの自然，アメリカの内にあるものに詩的世界を求めようとするウィリアムズの決意である。

詩神は，さらに，次の様に告げる。

... "Look there! See them!
There in the oat field with the horses,
See them there! bowed by their passions
Crushed down, that had been raised as a foof beam!
The weight of the sky is upon them
Under which all roof beams crumble. (ll. 31～36)

アメリカの自然の中に詩的世界を見出すべきだというこれまでの言葉に続いて，今度は，現実に生きる人間，現実にうちひしがれている人間をも無視してはならないという言葉が語られるのである。

詩人は，詩神に伴われて，飛翔を続ける。パタソンの街，沼沢地に立っている建物，運河，のろのろ進む列車，こういったものが，

All so old, so familiar—so new now
To my marvelling eyes as we passed
Invisible. (ll. 50～52)

になる。今まで看過してきたパタソンの街が，新しい存在として詩人の眼に映る。詩人は，パタソンやニュー・ジャージーやアメリカの自然や人間や文明を，詩的対象として再発見するのである。

続く *SOOTHSAY* に於いて，詩神はこう語る。

... "Behold yourself old!
Sustained in strength, wielding might in gript surges! (ll. 6～7)

"old" という言葉は，これまで詩人が詩神とともに世界を見て来た結果の "experienced" という意味であろう。詩神は，これまで導いてきたこの詩人

に，詩人自らの力を信じさせようとする。そして，この詩人にすべてを託そうとするのである。

詩神は，詩人の力が自然をも動かすものだと語り，ついには，

You are the wind coming that stills birds,
Shakes the leaves in booming polyphony— (ll. 18～19)

と，詩人を自然と同一視する。『パタソン』に於いて，パタソンが，都市であるとともに人間でもあり，川や芸術にもなるように，これは，ウィリアムズの詩にある変幻自在な変容の，一つの現れである。

詩神は，終りに，次のように述べる。

"Good is my over lip and evil
My under lip to you henceforth:
For I have taken your soul between my two hands
And this shall be as it is spoken." (ll. 30～34)

詩人の魂は，今，詩神の手に委ねられ，詩人は，善悪にかかわらず真実をこれからは語らなければならないのである。

そしていよいよ最後の *ST. JAMES' GROVE* になる。

And so it came to that last day
When, she leading by the hand, we went out
Early in the morning, I heavy of heart
For I knew the novitiate was ended
The ecstasy was over, the life begun. (ll. 1～5)

詩人の「心が重い (heavy of heart)」のは，「修養の時が終り (the novitate was ended)」「恍惚も過ぎ去り (The ecstacy was over)」「人生が始った (the life begun)」のが分ったからである。これまでの安逸な詩の世界から，厳しい真の詩の世界に入ることが，それが現実となった今は，重く心にのしかかるのだ。

詩神は，詩人を川に伴う。

She bent forward and knelt by the river,
The Passaic, that filthy river. (ll. 14～15)

「パセイック川，この汚れた川 (The Passic, that filthy river)」こそが，現実の世界の象徴である。その川の水をすくいあげて，詩神は二人の額をぬらす。儀式――バプティズム――が始まる。詩神は川に向って言う。

"River, we are old, you and I,
We are old and by bad luck, beggars.
Lo, the filth in our hair, our bodies stink!
Old friend, here I have brought you
The yong soul you long asked of me. (ll. 20～24)

これは，汚れた現実を詩的現実として再生させるために，詩人を川に捧げようとする，詩神の意志の表明である。汚れたパセイック川が求めていた詩人は，パセイック川の，それが流れているパタソンの，そして，アメリカの現実を，描くよう求められているのだ。

詩神は，

"Enter, youth, into this bulk!
Enter, river, into this young man!"

と叫び，詩人とパセイック川との神秘的な合一が始まる。

Then the river began to enter my heart,
Eddying back cool and limpid
Into the crystal beginning of its days. (ll. 37～39)

川は，詩人の心臓に流れ込み，浄化されるが，

But with the rebound it leaped forward:
Muddy, then black and shrunken
Till I felt the utter depth of its rottenness
The vile breadth of its degradation
And dropped down knowing this was me now. (ll. 40～44)

と，再び汚れた現実に戻る。詩人は，ここで，「汚濁した深み (the utter depth of its rottenness)」や「堕落した汚わしい広さ (The vile breadth of its degradation)」に触れて，「これが今や自分である (this was me now)」ことを知る。詩人は，醜悪な現実の世界と自己とを同一視することによって，自分自身の真の詩的世界に到達したのである。

しかし，川との合一は，苦悩でもある。

I could have shouted out in my agony
At the sight of myself departing
Forever— (ll. 36～38)

それは，「永遠に／自分が去って行く (myself departing／Forever)」からだ。これまでの自己の世界との永遠の訣別であるからだ。苦悶を感じながらも，詩人は，川との完全な合一を遂げる。

詩神は，川に向って，詩神の望む豊かな世界の到来を予言する。そして，この長い詩は，詩神の次の言葉で終る。

Live, river, live in luxuriance
Remembering this our son,
In remembrance of me and my sorrow
And of the new wandering!" (ll. 80～84)

「生きよ，川よ，繁栄の中に生きよ (Live, river, live in luxuriance)」という，詩人と合一した川の繁栄を願う言葉は，同時に，詩人の詩的世界の繁栄を祈る言葉でもある。「この私たちの息子 (this our son)」である詩人を新しい詩的世界に残し，詩神は，別離の悲しみを抱きながら，新たな放浪の旅に出る。汚れたパセイック川と合一することによって，真の詩的世界に到達した詩人は，詩神の庇護の元を離れて，新しい出発をするのである。

以上，"The Wanderer"を，筋を追いながら考察したわけだが，ここで，前述したギリシヤ神話のデメテルの話とこの詩との関係について，ごく簡単に触れておきたい。老婆の姿に身をやつし，誘拐された娘ペルセフォネをさがし求めて放浪の旅をする大地の女神デメテルは，"The Wanderer"の醜い老婆をとってさまよう詩神と重ね合わせることが出来る。デメテルは，放浪の途中，エレウシスの王子デモフォンの乳母となり，王子を聖なる火で清めて神性を与えようとする。これは果せなかったが，デメテルは，彼に鋤の使用法と種を蒔く方法を教え，翼のある龍にひかせた二輪車に乗せて世界を廻ることになる。これも，詩神が，詩人をパセイック川の水の中に投じ，詩人に詩作の力を与えたことと，類似している。さらに，ペルセフォネの冥府からの蘇りは，詩人のパイセック川との合一からの再出発と同質であると言えよう。

"The Wanderer"は，叙述的な物語の形式をとどめ，古い用語や修辞法を

残し，ロマン主義的で超自然的な要素の香りもあるが，事物の即物的な把握や，リアリスティックな描写，イメージの自由奔放な飛躍や急転，といったウィリアムズ独自の技法を，随所に示している。内容的には，ビルドゥングス・ロマン，人間の魂の遍歴の詩，さらには，宗教詩[5]ともとれるが，やはり，これまで見てきた様に，それまでの伝統的な詩の世界を捨てて，自己の身近にある現実，自己の立っているパタソンやニュー・ジャージーやアメリカの現実の中に真の詩的世界を見出そうとするウィリアムズの宣言である。これらの意味で，"The Wanderer" は，ウィリアムズの転換点を示すものと言え，来るべき大作 *Paterson* の萌芽とも考えられるのである。

〔注〕

(1) テキストは，Williams, Carlos William. *The Collected Earlier Poems.* New York: New Directions Publishing Co., 1966 を使用した。

(2) Sherman Paul, *The Music of Survival*, Chicago, University of Illinois Press, 1968, p. 41.

(3) 十国　修「羨望の構造」(『ユリイカ』, Vol. 12-7, 青土社) p. 104.

(4) Rod Townley, *The early Poetry of William Carlos Williams*, London, Cornell University Press, 1975, p. 68.

(5) *Ibid.*, p. 18.